

IV-62

都市水路の環境資源としての活用の方向性に関する研究
—大東市水路整備の地域住民による事後評価に基づいて—

大阪産業大学 正会員 川口 将武

大阪産業大学 正会員 榊原 和彦

非会員 中山 晃生

〔1〕 研究の背景及び目的

地域特有の風土に根ざした魅力ある地域景観を創造するために、水や緑は重要な環境資源として様々な場面、手法によりまちづくりに活用されている。近年、大都市近郊部における水路は宅地化により、かつての機能を失い未利用状態となったり、排水路となることで環境が悪化している状況にあるといえ、その環境の再生が求められているといえる。

そこで本研究は、水路をほぼ同時期に一方は暗渠化、もう一方は開水路とした遊歩道整備が行われた地区において、周辺住民を被験者としたアンケート調査に基づき整備後の空間評価を分析することによって、環境資源としての都市水路の可能性と再生の方向性を探ることを目的とする。

〔2〕 研究の方法

アンケート調査の対象地とした大阪府大東市は、かつて農耕、水運等に活用されていた水路が荒れたまま放置状態で多く残る地域である。しかし、近年まちづくりと連携することでみどりを創出しつつ水路を再生させることを目的とした「大東市水路総合的利用基本計画」が策定された。そのような折、平成10年に初の完成を見た、「三箇地区せせらぎ水

路整備事業」の例を今回の研究の対象地区として選定した（図1）。

〔3〕 水路周辺地区における居住者特性 アンケートの方法、実施内容は表



図1 大東市
三箇地区地図

1に示す。アンケート結果から地区全体の住民特性として、居住歴が20年以上という旧住民が三箇一丁目40%、三丁目52.9%と多く、2～5年という新興住民は、二丁目41.4%、大東町61.5%と偏っているということが掘めた。利用頻度では、二丁目、大東町で約40%が毎日行くと回答しているものの、三丁目では毎日行く人は存在せず、45%の人が月に二、三度行く程度である。また、水路整備後に「魅力的だと感じる地区」の問いに全体で、約50%の人が水路を暗渠化した②区間の遊歩道整備地区を上げる声が多かった。二丁目、大東町は利用度の高い②区間を、未整備水路の残る三丁目の住民は①区間の水路修景に対する評価が高かった。

〔4〕 地区住民による整備後の空間評価 水路空間の印象について「潤い」という項目に関して、水の潤いを感じないとした人が43%近くであった。また、「親水性」を問う項目において、水に親しみにくいとした人が47%にも達し、水路の嫌いな要素を、水とする回答が40%にものぼり、総じて水

表1 アンケートの実施概要

対象地区	三箇一丁目～三丁目、大東町
配布枚数	700通
配布方法	無作為抽出、 各家の郵便受けに直接投函
回収方法	料金受取人払いによる郵送方式
実施期間	1998年12月16日～1999年1月31日
回収枚数 (率)	126通(18%)
アンケート 内容	住民の属性、水路の認識度、景観要素評価、 水路についての感想

キーワード：水路、環境資源、まちづくり

連絡先：〒574-8530 大阪府大東市中垣内3-1-1 大阪産業大学工学部環境デザイン学科

電話：0720-75-3001 FAX：0720-70-7857



写真1 せせらぎ水路①区間



写真2 遊歩道②区間



写真3 せせらぎ水路③区間

に対する評価は低いといえる。それは、水質の悪さやゴミの散乱といった不衛生さが要因となっていると推察される（図4）。次に、歩行空間に関しては、図2の整備前後比較の項目（歩道の幅が良くなった57.4%）や、図3の景観要素評価（通路37.1%）、及び、通行時の快適性を問う質問（快適と感じる計79.5%）から、遊歩道としての歩行空間の整備自体については高評価である。また、図3より「石積み（45.7%）」や、「樹木（41.4%）」、「草花（29.3%）」等の修景要素が、比較的评价の高いことは、整備後にできた身近な緑空間への満足感と推察される。

水路と周辺景観との調和については、44.4%が違和感を感じている。また、せせらぎ水路に対する意見についての記述式回答では、遊歩道の景観、機能面、安全性といった点で、好印象となる意見が多く見られたが、水質の悪さ、ゴミ等の利用者のモラルや、手入れ・清掃に関する苦情が極めて多いと同時に、事業予算に対する意見が比較的多いということが読取れた（図4）。

【5】結論・考察 本研究では、遊歩道整備が行われた周辺住民の評価を通じて、環境資源としての都市水路の可能性と再生の方向性を探ってきた。その結果、暗渠化した遊歩道整備が開水路整備よりも評価が高かったこと、また歩道の幅や夜間照明につ

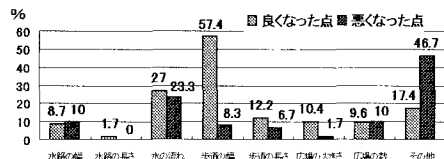


図2 整備前後の比較評価

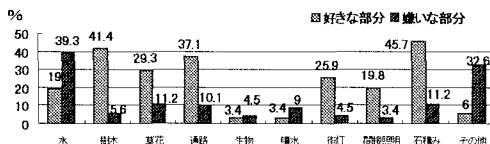


図3 水路景観要素の評価

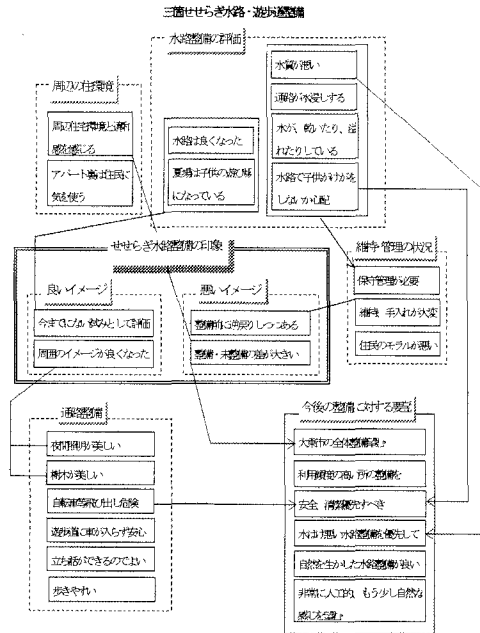


図4 自由回答の分析

いての評価が高いことからわかるように、通行に関する快適性の評価が高かったことが読みとれる。また、毎日の買い物などで通行するという住民も多数存在することから、本地区においては、路（みち）としての空地性、連続性が最も重要な環境資源としての要素であると考察できる。ただし、利用目的が通勤・通学・買い物といった目的地と目的地をつなぐ単なる通行機能のみに偏っていることから考えると、景観要素の評価が高かった石積み・樹木・草花といったみどりの要素とともに整備すること、あるいは「不衛生さ・危険性・維持管理の低さ」といった水に関する否定的評価を住民とともに解決するといった「地域活動」の仕組みづくりを行っていくことが都市水路を再生に導く方向性であると考えられる。